

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「近世イスラーム国家と多元的社会」（平成 23 年度第 1 回研究会）

日時：平成 23 年 6 月 18 日（土曜日）午後 1 時より午後 6 時

場所：本郷サテライト 4F 会議室

## 1. 近藤信彰（AA 研所員）「近世帝国としてのサファヴィー朝：研究の現状と課題」

### （1）プロジェクトの趣旨

近世国家の要素として、暫定的に、火器の導入による強力な軍隊、高度に発達した官僚制、多民族からなる国家、多元的な社会、長期の安定などを想定している。あえて「近世」という言葉を用いた理由は、従来のいわゆる「イスラーム世界史」では専門分化が進んだ結果、個別王朝史に安住する傾向が強いこと、そうでなければ「イスラーム世界」の一体性を強調しつつ、その伝統的社会的モデルとして中世アラブ社会を採用する傾向が強いことである。そのなかで、オスマン朝やサファヴィー朝、ムガル朝といった近世帝国の研究は、その世界史上の意義にもかかわらず、そして日本の研究水準の高さにもかかわらず、相応しい地位を得ているとは言い難い。あえて、「近世」を打ち出すことにより、この分野の研究の重要性を示すとともに、共同研究を行うことで、高い研究水準を持ちながらあまりに個別化している諸研究をより大きな文脈に位置づけたい。

### （2）サファヴィー朝研究の現状と課題

これまでは王朝中心かつ中世史の延長として主に行われてきた。古くからある「国民国家」か「遊牧部族国家」という議論も、現在の文脈では異なった解釈が可能である。最近盛んなのはサファヴィー朝の国家イデオロギーに関する研究であり、サイイド／スーフィズム／過激シーア派から正統的 12 イマーム派への変化をレジティマシー論と結びつけながらさまざまな形で論じるものが多い。ただ、イデオロギーやレジティマシーの研究ばかりが発表され、サファヴィー朝下の国家や社会の実態に関する研究は必ずしも盛んではない。これはとりわけ前半期に関しては叙述史料に頼らざるをえず、イランの国際的な孤立から史料へのアクセスも外国人には困難であるという事情も反映している。一方で、過去 10 年ほどの間に徐々に増えてきた後半期の研究により、近世国家としてのサファヴィー朝の姿も明らかになりつつある。こうした中で、日本の研究者は研究の質・量の面で世界有数の地位にあり、イランへのアクセスも確保されていることから、これからはまとまった研究を国内・国外に発信していくことが望まれる。

### （3）個人研究

個人としてサファヴィー朝に関して行っているのは、サファヴィー朝後半期の行政便覧『諸王の決まり(Dastūr al-Molūk)』の研究である。すでに 2 つの校訂テキストと 1 つのロシア語訳、2 つの英訳が刊行されているサファヴィー朝の官制に関する最も重要な史料の一つであるが、これら既存の研究は後半部に欠落のある写本に基づいた不完全なものであ

る。報告者はインドのハイドラバートで完全な写本を閲覧することができ、その校訂テキストを作成中である。この史料の分析により、近世帝国としてのサファヴィー朝の姿を明らかにするのが当面の目標である。(近藤 信彰)

## 2. 高松洋一 (AA 研所員) 「オスマン朝研究をめぐる近年の状況と今後の展望」

### (1) オスマン朝と「近世」

オスマン朝は 1300 年ごろに成立し、20 世紀の 1922 年まで存続した国家であり、その 600 年以上にわたる歴史をひとくくりにとらえることは困難である。トルコ共和国の歴史学において 1453-1789 年をカバーする「近世」という概念が存在しないわけではないが、オスマン朝の時代区分として積極的に用いられているわけではない。従来は 1300-1600 年を「古典期(Classical Age)」とするイナルジュクが提唱した時期区分が影響を持ったが、オスマン朝が君侯国であった初期と大帝国となった時期を同の区分で扱うことに説得性を欠く。

近年になって欧米のオスマン史研究者により、ヨーロッパ近世との比較を念頭におきつつ、1500-1800 年を 1 つの時代として"Early Modern"と呼ぶ傾向が目立つ。しかしヨーロッパよりむしろ同時代的に存在したサファヴィー朝、ムガル朝を視野に収めることで、「イスラーム近世」という概念を打ち出せる可能性があるのではないかと思われる。

### (2) 近年のオスマン朝研究の状況

近年、欧米ではオスマン朝史の講座が減少しているにもかかわらず、国外で学位を取得したトルコ人研究者の数が増し、彼らを新設の私立大学が招聘したこともあって、トルコにおける研究業績は、20 世紀までと比して量はもとより質的にも大幅に向上している。

この傾向を助長しているのは、トルコ国内の文書館、図書館における電子化の進展により、史料へのアクセスが劇的に改善されたことである。イスタンブールの首相府オスマン文書館(BOA)においては、カタログの電子化によって資料の検索と請求が格段に効率化した一方、所蔵資料の電子化により、デジタル画像による閲覧、複写が一般化しつつある。さらに最近になって BOA への史料の集約化が進み、アンカラの国立図書館所蔵のイスラーム法廷記録が移管され、デジタル画像の閲覧が可能になったほか、トプカプ宮殿博物館文書館が所蔵する帳簿の画像についても同様に BOA での閲覧が可能となった。また世界最大のイスラーム写本コレクションを擁するスレイマニエ図書館においても、収蔵資料の電子化が進み、検索・閲覧の一体化システムのおかげで、研究の効率は飛躍的に向上した。

これらに加えて 1993 年創立のイスタンブールのイスラーム研究センターが、内外で出版されたイスラーム関係の膨大な蔵書を充実させている一方、オンライン上の種々のデータベースや出版物を、研究者の利便に供していることにも言及しておかねばならない。

### (3) オスマン朝研究の今後の展望

上記のような恵まれた環境のもと、今後もトルコ人研究者の躍進はいつそう顕著となり、外国人研究者がそれに伍していくことは、ますます困難になっていくと思われる。本邦の研究者には、研究環境の向上による膨大な情報量の中で自己を見失うことなく、オスマン朝史、トルコ史の枠に留まらない視座を保ちつつ、独自性を発揮することが求められよう。